



ある団地の一室のベランダには「炊飯ジャー」が鎮座しており、それはどうやら使用中であるらしく水蒸気がもうもうと上がっている。夢の中に出て来そうなシュールな光景である。言葉で聞いたり文字で読めば、それは変だ、あり得ない、と拒絶する人もいるかもしれない。しかしこうしたあり得そうも無い出来事も起こりえるのだ、という認識に寄り添うのが「映画」というジャンルである。このことは、例えばいまや一大ジャンルになったホラー映画の「ゾンビもの」を想起すればわかり易いだろうか。

死んだはずの人間が不意に起き上がり、墓穴からも死体が這い出して通りを歩き回る。そんな出来事は確かにあり得そうも無いが、しかしあり得る。ただ人類が今までそのような出来事に遭遇したことがないだけで、この先もあり得ないとは言いがたいではないか。可能性は低だろうが、ゼロではない。ちなみにそう言い続けるのはゾンビ映画を生み出したアメリカのような土葬の国においてであって、死体を火葬して灰にしてしまう日本ではかなり心許ない。この文化の違い、前提の違いは重要であるが、しかしそれでもやはり、可能性はゼロではない。

自分の目で見ただけのものしか信じない、という信念を「リアリズム」と呼ぶとすれば、可能性がゼロでなければどんなにあり得そうに無いことでも起こりえる、という信念もまた「リアリズム」である。

ところがこの「リアリズム」は、ベランダの炊飯ジャーならまだ安心していられるが、時として「業」とでも呼ぶ他ないようなものを招き寄せてしまうので厄介である。

かれこれ十数年來のつきあいになる友人から聞いたのだが、じつは彼の父親は彼の幼少の頃から失踪中で、先日その父

映画『ウエスト・トウキョウ・ストーリー』のよからぬ企みについて／合田典彦（脚本・構成）

親から突然電

話がかかって来たらしいのだ。しかし彼が近況を尋ねてみたところ、父親は目下「永久機関」の開発に携わっているらしい。そんな映画のようなフィクションなことが、もつと言えれば雑誌「ムー」のようなことがこんな身近に起こるとは！と私は驚き、映画人として心強く思いましたが、事実は複雑であった。

この友人は近年売れっ子の映画監督なのだが、彼に映画を撮るように促したのは在りし日の父親だったという。そして彼が本当に映画監督になったことを知って父親は電話をかけてきたのだ。ここまでは良い話なのだが、油断出来ないのはこの先である。その電話口の父親は、「おまえにもつとすごい映画を撮らせるためにお父さんは一山当てようとがんばっているのだ」と言い、「だからお前もがんばれ」と彼を励ましたらしいのだ。そう

語る彼の顔はどこか誇らしそうでもあり、私は不意に、「親の因果が子にたたり」という「業」の物語の中に迷い込んでしまったような感覚に囚われてしまった。

彼の父親が追う「永久機関」という夢のような話しは、映画の「リアリ

ズム」におい

てはあり得るものである。今までそれが無かっただけであり、発明や発見とは多かれ少なかれそういうものだろう。しかしそれが現実のものとなるまでは、そのような夢を追う者は現実世界の「あちら側」に行ってしまう。あるいは夢破れて帰って来るまでは「物語」の中の住人であるとも言えるだろうか。トルキンの『指輪物語』の翻訳者である瀬田貞二の言う「物語」の最小単位としての「行って、帰って来る」の途上に、いまだ帰らぬ彼の父親は在るからだ。そして、私の友人の映画監督は、その父親の夢物語の一部なのだ。

ところで、映像に携わる者たちをしばしば捉える疑問に、「画になる人」とならない人、あるいは「演技が出来る人」と出来ない人がいるのはなぜなのだ、というものがある。ちなみに父親が失踪中のこの映画監督は撮られる側に回せば画になるのでは

ないかと私は踏んでいるのだが、それは勘にすぎず、この疑問への答えは持ち合わせていない。

映画『ウエスト・トウキョウ・ストーリー』の撮影において、「画になる人」として監督

が最初に見出したのは、おそらく、文芸批評家の秋山駿氏の奥さんである秋山法子さんだったのだろうと思う（この映画の監督と、父親が失踪中の監督とは別人である。念のため）。この映画に出て来る彼女を観ていると「画になる人」とは物語を感じさせる人である、と拙速にも定義してしまいたくなるような衝動にかられるのだが、彼女は実生活において「炊飯ジャー」をベランダに出して使用し続けていた人でもある。そのようなあり得そうも無い出来事の中で暮らし続けた人だからこそ、容易に映画の中の住人にもなれてしまうのかもしれない。そして、その人物の横に、まだ物語の手前で尻込みしているかのような一人の女学生を寄り添わせてみよう、勿論この女学生は素人であり、役者ではないけれど、だからこそ演じられる彼女の役があるはずだ、と我々がこの映画の脚本構成を練っていた段階で考えていたかどうかは心許ないが、それに類する企みがあったことは告白しておかねばなるまい。よからぬ企み、あるいは「業」の深い企みとすら言えるだ



ろうか。

それは、とある大学の文学部で学んでいる女学生がひょんなことから映画に出ることになり、そ



の一年後、彼女の姿は劇場のスクリーンで衆目にむかえられることになる、というアイドル映画のような「物語」を、実際の一人の女学生の身の上引き起こしてしまおうというものである。あり得そうも無い出来事だがそれはあり得るのであり、そして実際に、監督にキャストイングされた女学生の身にそれは起きたのである。その後、彼女はなにくわぬ顔で日常に戻り、今まで通りの学生生活を送っているらしい。彼女がちゃんと「帰って来た」ことに私はホッと胸を撫で下ろしているのだが、それと同時に楽しみでもあるのは、このあり得そうも無い物語をくぐり抜けた彼女が、自分の身に降りかかったこの出来事を今後どのように物語っていくのだろうかということである。それが彼女にとって愉快な物語であってくれたらと願う。

『武蔵野大学武蔵野文学館紀要第5号』より転載

合田典彦 ● 1999年早稲田大学卒業。映画美学校第3期生。『リリー・オブ・ザ・バレー』（2003年）監督・脚本。青山真治監督『東京公園』（2011年）で脚本を担当。同作は第64回ロカルノ国際映画祭で金豹賞（グランプリ）審査員特別賞を受賞。